

〈指導記録〉「青い空コンサート」

——器楽と合唱演奏の指導についての報告——

井 中 あ け み

はじめに

「青い空コンサート」で「音楽」を担当して、今回で4年目を迎えた。「音楽」が専門ではない幼児教育・保育科の学生で構成する速成アンサンブル「楽団」であり、毎年演奏技能のレベルの異なる集団を1年限りで指導しなければならない。その中で、観客である子供達が楽しむことと、演奏する学生達が達成感を得ることの2つを目的として奮闘を重ねている。

担当する学生については、昨年度より「器楽」と「合唱」の2つの専攻を正規の授業として位置付けて、それぞれ「アンサンブル演奏」と「合唱」を実施している。器楽を専攻とする際に、名目上〈オーディション有〉という条件付きで選択しなければならなかったものの、実質的には希望者全員を希望通り専攻させており、オーディションによって演奏技術の高い学生を選ぶことはできなかった。あわせて、例年になく楽器経験者の少ない集団を指導することとなった。それゆえ音楽に対するモチベーションの高まりがないことは後々まで大きく問題視することになった。しかしアンサンブル演奏を担当するという責任感を持たせ、学生達自らが主体的に工夫をし、落ち着いて演奏の練習に取り組めるという点が期待される。今回は、その効果の検証も含め、指導過程を記載していきたい。

1. 器楽専攻のオーディション

器楽希望者は全員で34名おり、実際には全員希望通り選択できるが、演奏を発表しなければならない（オーディションと呼ぶ）ことを条件とした。

オーディション曲目内容

	楽 器	曲 目
A (1名)	ピアノ	歌謡曲
B (1名)	歌とピアノ	歌謡曲
C (2名)	歌とギター (男子2名)	歌謡曲
D (2名)	歌とピアノ	歌謡曲
E (1名)	ピアノ	ショパンワルツ7番

F	(1名)	アコースティックギター (男子)	歌謡曲
G	(2名)	歌とギター (男子・女子)	童謡曲
H	(1名)	琴	琴曲
I	(1名)	ピアノ	歌謡曲
J	(2名)	ピアノ連弾	歌謡曲
K	(1名)	電子オルガン	ディズニール曲
L	(1名)	トランペット	ディズニール曲
M	(5名)	合唱とピアノ伴奏	歌謡曲
N	(1名)	アルトサクソ	童謡曲
O	(1名)	アコーディオン	童謡曲
P	(1名)	バイオリン	童謡曲
Q	(1名)	電子オルガン (男子)	ディズニール曲
R	(1名)	ベースギター (男子)	歌謡曲
S	(1名)	ピアノ	歌謡曲
T	(2名)	歌唱 (二重唱)	歌謡曲
U	(1名)	歌唱 (ソロ)	歌謡曲
V	(2名)	ピアノ連弾	ディズニール曲
W	(1名)	歌	歌謡曲
X	(1名)	電子オルガン	ジブリ曲

〈特 徴〉

- (1) この表からもうかがえるように、曲目の大半が歌謡曲である。発表曲にジャンルの指定は特にしなかったせいか、日頃各自が慣れ親しみ、身近な曲を選んでいる。
- (2) 楽器の種類は少なく、ほとんどがピアノなどの鍵盤楽器であり、演奏のレベルはバイエル後半が大半で、比較的高いレベルの演奏は3組程度であった。
楽器を所有している学生も始めたばかりというパターンが3組おり、実際には全くの初心者と判断した。
- (3) 演奏のレベルに関係なくソロの演奏が多く、アンサンブルの経験の乏しさがうかがえる。

〈問題点〉

先に挙げた特徴からもいえるように、今年度の場合、吹奏楽や部活動、その他の活動の経験者がほとんどいないことは、演奏の最終的な仕上がりを大きく左右するものと考えられる。楽器を選択しなかった学生の中に、吹奏楽の経験者も若干いたようだが、オーディションという第一関門に挑戦することに抵抗があり、器楽専攻を断念した学生もいた。

いずれにしる学生達のグループ活動の乏しさや友人同士のコミュニケーションの不器用さ

が浮き彫りにされている今日、いかにしてこの器楽の演奏をアンサンブル演奏に発展させていくかが、大きなポイントとなるであろう。

2. 音楽Ⅱの授業の展開

昨年度同様、音楽Ⅱにおいて合唱と器楽のどちらかを選択する。クラスは全部で6クラスあり、1コマを2つに分け1クラス45分の授業としている。（但し本番の演奏はA・BC・Dクラスの3クラスとしてそれぞれが発表を行った。）

① 春学期（前半）の進行

(ア) 合唱 ……………「青い空コンサート」に向けてのパート分け（合唱パート）から行（声楽講師担当）い、基礎発声練習、二部合唱、三部合唱などへと練習を進めていく。

(イ) 器 楽 ……………各自の得意楽器を決定し、「青い空コンサート」のそれぞれの演奏曲目に向けて練習を行う。

得意楽器のない学生または得意楽器以外の楽器希望者は楽器の奏法から行う。

② 秋学期（後半）の進行

合唱と器楽との合同授業とする。合唱は器楽の行う演奏によって合唱を行う。また、器楽だけのアンサンブル演奏も行う。

A1		A2		B		C		D1		D2	
合唱	器楽										
12	6	13	4	14	3	14	5	10	9	13	7

（数字は人数）

〈問題点〉

上の数字からわかるように、各クラス合唱と器楽の選択人数にばらつきがみられる。そのためクラスごとの曲目設定に偏りがでてしまうことが懸念された。今年度のように演奏経験が乏しい者が多い学年の場合でも、器楽の人数が多ければ楽器の種類も当然増え、曲目も華やかなものが予想される。逆に楽器の人数が少なければおとなしくシンプルなものが考えられる。その意味からも学生の意思のみで器楽を選択するのは「青い空コンサート」の音楽プログラム構成上何らかの支障を来すことがわかった。

また先にも述べたとおり、演奏の経験が乏しい学生が多いため器楽の人数の多いクラスは、個々の条件にあった楽器の決定が大変困難であり、選曲についても色々な角度から考えて制約を付けざるをえないこととなった。

いずれにしろ色々な面において難色を示す「音楽Ⅱ」の授業であり、合唱と器楽の合同練習の際にどう曲目構成を行うかが、このコンサートの大きなポイントとなった。

3. 曲目の構成

〈昨年度（16年度）の反省点〉

昨年度は数人の楽器経験者が各クラスに在籍していたので、プログラム構成上も選曲範囲が広くまた楽器の種類も豊富であった。楽曲の中に技巧的な見せ場や演奏技術からなるいわゆる“聞かせどころ”を披露することができた。しかし「青い空コンサート」の中心の観客者である年齢の低い子供の立場としては、演奏者の演奏技術の披露は退屈であったり、難しすぎたりといった域をでないことが昨年のアンケートの調査でわかっている。これは演奏者側の心情と観客側の期待との明らかなずれが生じていたためであり、昨年度の最大の課題として残されていた。そこで今回は観客側に対しての配慮を第一に考え、創造大の幼児教育・保育科としての子供達に対する語りかけができるよう心がけて構成を行うこととした。

また、曲目のテーマを「四季のうた」とし、その中を3つの部分に分けた。第1部はオープニングとして「ディズニー曲集」、第2部は「四季のうた」、第3部は「歌い残したいアニメ曲」である。

(1) プログラム

曲 目	演 奏 形 式
エレクトリカルパレード	器楽
ビビディバビディブ	器楽・合唱
チムチムチェリー	器楽
小さな世界	器楽・合唱
ふるさと	器楽
春の小川	合唱（ピアノ2台で伴奏）
お花が笑った	合唱・器楽
トトロ	器楽
さんぽ	合唱・器楽
ほたるこい	合唱（アカペラ）
茶摘み	合唱・器楽
島唄	合唱・器楽
虫のこえ	合唱・器楽
七つの子	合唱（ピアノ1台で伴奏）
村祭り	合唱・器楽
きよしこの夜	器楽
ジングルベル	合唱・器楽
雪	合唱・器楽
ドラえもん	合唱・器楽
君をのせて	合唱・器楽

(2) 曲目内容

第1部 〈ディズニー曲集（メドレー）〉

- ① **エレクトリカルパレード** …… [トランペット・電子オルガン・ピアノ2台（1st, 2nd）]
 オープニングの曲にふさわしくトランペットのファンファーレで始まる大変華やかな曲。
 ＊大変リズムの難易度の高い曲であるので、それに対応しきれない部分に編曲の工夫を凝らし、他の楽器同士が同じメロディーを共有し、違った音色で音の幅を広げ、華やかさにポイントをおいた。
- ② **ビビディバビディブ** …… [Dクラス合唱・器楽（ピアノ・フルート・ドラム・木琴・鉄琴・打楽器）]
 踊り付きの2部合唱。
 ＊印象的なメロディーが伴奏をする楽器にも現れており、下がり気味な合唱の音程を助けるよう配慮した。
- ③ **チムチムチェリー** …… [ピアノ2台・フルート・鉄琴・打楽器]
 フルートのメロディーを中心に単純な短調のメロディーが特徴。
 ＊テンポのよい曲の前後でひと休みするための曲として用いた。素朴さが表現できるような音色選びに気を配った。
- ④ **小さな世界** …… [Dクラス合唱・器楽（ピアノ2台・フルート・アルトサックス・トランペット・木琴2台・鉄琴・グロッケン・打楽器・ドラム・アコースティックギター）]
 踊りと行進付きの二部合唱。
 ＊器楽希望者が一番多かったクラスで、楽器の大編成となった。大人数なので、様々な楽器を用い、元気と明るさをテーマに編曲を試みた。合唱は歌いながらの踊りをするので、活気と力強さを表現した。

ここでの4曲はオープニングのエレクトリカルパレードをきっかけに、緊張している子供達の心を解し、体に心地よくリズムが感じられるように選んだ聴衆のための一種準備体操である。またディズニー曲集は長い間世界的人気のキャラクターであり、このディズニーなくしては子供を語るには何か物足りないというのが、正直な意見であろう。また子

供とその親の世代まで一緒に楽しむことのできる貴重なスキンシップの音楽と考えることも可能であろう。

第2部〈四季のうた〉

- ① ふるさと …………… [器楽(鉄琴・木琴・ピアノ2台・トランペット・アルトサクソ)]
観客に各自のイメージを抱いて頂くために、楽器のみによる演奏。
*「四季のうた」はすべてが自分の故郷が原点であると情景を設定し、この曲の叙情的な演奏を目指した。
- ② 春の小川 …………… [B・Cクラス二部合唱・器楽(ピアノ2台)]
唱歌の代表曲の1つ。
*春の訪れをピアノ伴奏のみで行った。音色と水の流れを思わせる16分音符の演奏に注意した。
合唱は身体を軽くゆすって春の訪れのリズムを表現した。
- ③ お花が笑った …………… [B・Cクラス二部合唱・器楽(ピアノ2台・鉄琴・木琴・グロッケン・打楽器)]
同じ旋律が輪唱で繰り返されていく、合唱曲。
*単純なメロディーを色々な楽器で役割分担することで、曲が色彩豊かになり、お花のイメージ化がされるよう音色にこだわった。曲のフレーズごとに手に持っていた色とりどりのスカーフでお花を作り、手の上に乗せて表現した。
- ④ トトロ …………… [器楽(ピアノ2台・電子オルガン・鉄琴・木琴・ドラム・アコーディオン・アコースティックギター・打楽器)]
季節感には関係ないこの曲であるが、浮き浮きとした旋律で春の季節感を増幅しようと狙った曲目。
*おとなしい春の曲がそのまま暗いイメージで終えないように、テンポ感を注意して明るい演奏を努力した。
- ⑤ さんぽ …………… [B・Cクラス二部合唱・器楽(打楽器・ピアノ2台・鉄琴・木琴・電子オルガン・アコースティックギター)]
合唱はさんぽの動きを入れ、つねに躍動感をもったリズムカルな曲想。
*多種の打楽器のリズムが中心となって、曲全体を支配するのでリズムの感じ方から彼らの表情に至るまで注意を払った。

- ⑥ ほたるこい …………… [Dクラス二部合唱・木琴]
 唯一のアカペラ曲。
 ＊音程の下がりに気を付ける。ほたるの情景をイメージするためペンライトであかりをとところどころに入れた。
 ＊木琴は「A」の音一音だけでリズムを刻み、音のない“ほたる”を表現した。
- ⑦ 茶摘み …………… [Dクラス二部合唱・器楽（ピアノ・琴・木琴・打楽器）]
 昔からの手遊びと動作付きでの合唱。
 ＊日本の伝統的な部分を手遊びで表現していることに合わせて、楽器に琴を入れた。また打楽器の特徴的なリズムを手遊びの動きと共に印象付け、和と洋の組み合わせを試みた。
- ⑧ 鳥 唄 …………… [全員二部合唱・器楽（ピアノ二台・木琴・鉄琴・アコースティックギター・ベースギター・ドラム・電子オルガン）]
 ＊沖縄民謡といえば、やはり夏のイメージは拭い去れず、夏の季節のしめくくりとして、昨年同様に取り入れた。
 ＊音楽に込められた歌詞の内容を深く追求するとともに、戦争の悲惨さを語り継いでいく貴重な歌として指導を行った。
- ⑨ 虫のこえ …………… [Aクラス二部合唱・器楽（ピアノ・木琴・打楽器）]
 四季の移り変わりのはっきりした曲。
 踊りの動き付きの合唱。
 ＊虫の鳴き声が打楽器で表せるよう十分な楽器の選択をし、曲の始まりを印象付けた。
- ⑩ 七つの子 …………… [Aクラス二部合唱・器楽（ピアノ）]
 踊りの動き付き合唱。
 ＊唱歌の中でも特に日本語を大切に意識し、言葉の美しい発音が、美しい音楽表現につながっていくことなどに注意し、楽器はピアノ1台で行った。
- ⑪ 村祭り …………… [Aクラス二部合唱・器楽（太鼓・ピアノ2台・木琴・打楽器）]
 バチを持って和太鼓を叩く時の体勢の力強い踊りを付け、日本の特有の祭りの感触を味わえるよう演出した。
 ＊太鼓と打楽器（クラベス）の強いリズムと木琴の和音で叩く様々なリズムの音色を幅広く演奏するようにした。

- ⑫ きよしこの夜 ……… [器楽 (鉄琴・電子オルガン・木琴・ピアノ・打楽器・アコースティックギター)]
 素朴な鉄琴のメロディーで旋律の美しさを強調。
 *敢えて曲を短く切り、メロディーがより綺麗に演奏できるようにそれぞれの楽器の奏法に気を配った。
- ⑬ ジングルベル ……… [Aクラス二部合唱・器楽 (ピアノ2台・電気オルガン・打楽器・鉄琴・木琴・ベースギター・アコースティックギター・ドラム)]
 クリスマスソングの代表曲2曲が続くことから、「きよしこの夜」とは対照的に華やかな編成。
 *合唱は「鈴」を手に持ち、踊り付きの動作に合わせてならし、器楽の打楽器とはまた異なったリズムで鈴の音を鳴らした。
 *楽器はさらに合唱の華やかさや楽しさを強調する役目としての伴奏を果たした。
- ⑭ 雪 …………… [B・Cクラス二部合唱・器楽 (ピアノ・鉄琴・木琴・電子オルガン・打楽器)]
 手に雪を象ったポンポンを持ち、雪が降ってくる動作を踊りで表現した合唱。
 *踊りを用いることでこの童謡の意味を歌詞と共にさらにわかりやすく訴えられると考えた。また楽器のリズムは雪の降る情景を作り出せるよう注意した。

「四季のうた」14曲はメドレー形式演奏とした(鳥唄を除く)。唱歌や童謡が主であるため全体的に暗さを招かぬよう器楽の編曲に重点をおいた。編曲は既製の楽譜のものを使用するのではなく、各学生の演奏レベル、楽器の種類、合唱とのバランス、曲の前後のバランス等プログラムを構成した時点からオリジナルで作成したものである。

また合唱において動作を用いた歌唱を行うことは本来の音楽会の演奏スタイルではない。しかし実際の保育現場での行事等を想定すると、お遊戯や音楽劇など動きを用いた行事は必ずと言っていいほど行われている。その意味からも曲にあった動きを考え、その動作によって歌詞の意味を深く追求していくことは、まだ言葉を充分把握し切れない子供達に、わかりやすさとより強い印象を与えることになるのではないだろうか。ここでの手遊びや踊りは学生達自身で全て創作している。

第3部 〈歌い残したいアニメ曲〉

- ① ドラえもん …………… [全員斉唱・器楽 (ピアノカ・大太鼓・鉄琴・コンガ・ギター・ドラム・ベースギター・ピアノ2台・電子オルガン)]

誰もが口ずさみ元気を出せる所謂「国民的アニメ」曲。

*演奏者側だけでなく会場の観客の方々と一緒になろうという目的を持って選曲した。また学生達の、感謝の気持ちの掛け声も歌の中で表現された。

- ② 君をのせて …………… [全員二部合唱・器楽（ピアノ2台・ギター2台・ベースギター・ドラム・鉄琴・ボンゴ・電子オルガン・ハーモニカ）]

観客中心にプログラムを進めてきたが、学生達の主張を最後に歌い収めたいと考えた曲。

*約120名という二部合唱の重厚さを主体に置き、楽器全員が男子という力強い演奏を目指した。

ここでの2曲は大人から子供まで人気のあるアニメ曲である。長い間放送され続けている「ドラえもん」は説明の必要はないだろう。「君をのせて」は、今では世界中で知られることとなった宮崎駿氏の「天空の城ラピュタ」の主題歌である。どちらも今の学生達が慣れ親しんだアニメの中の代表作なのではなかろうか。プログラムの最後に観客と一緒に共有し、楽しむことのできるこの2曲を配置した。

この2曲の楽器を担当したのは、全員男子学生である。この男子学生のためのアンサンブル演奏を提案し、申し出たのは彼らの方からであり、全く予期せぬことであった。しかし男子は各クラスバラバラに在籍しているため授業内のグループ編成は不可能で、メンバー全員での練習は授業の合間や夏休み、その他の課外の時間を利用して行う、という悪条件で始まった。各楽器の演奏は初心者かほとんどであったが、この演奏のためにわざわざ楽器を購入した学生もいた。また音楽Ⅱは選択授業であるため10人の中の1人は選択していなかった。しかし、これらの欠点がありながら10人で結束し演奏を行ったことは彼らの強い意思と努力の成果である。男子学生が幼児教育・保育科で活動することの大変さや専門職への就職の難しさは、決して避けられない問題であろう。またそれに向かって今以上の努力を強いられていることも事実といえよう。しかしながらこの短い短大生活の中で各自がそれぞれの目標に向かってこの活動を達成したことは見逃してはならないと考える。「最近の学生達はコミュニケーションが不器用である」とか、「チャレンジ精神が欠如している」等々の批判が飛び交う中、彼らの活躍は喜ぶべきものである。

4. 結果と成果

現在小学校や中学校の音楽の授業数がさらに減らされつつある。数年前から教科書に載っている曲目も変化し続けており、日本の唱歌や童謡が歌われる場や機会も少なくなっているであろう。

幼児が童謡やわらべ歌などの歌を通して、昔の生活や、伝統的な遊びなどを知ることは大

変価値のあることと考えられ、日本の文化を語り継いでいくためにも必要なものといえよう。確かに「ディズニー」もアニメの主題歌も多くの子供たちに受け入れられてスタンダードといえるほどになってきた。しかし、日本の豊かな四季の流れを歌や楽器を通して伝え継いでいきたいと考え、今年度も「四季のうた」と題名をつけて演奏曲の中心に据えた。

今回の場合、観客側（特に幼児）に受け入れられやすいような曲目設定、プログラミングを目標として選曲を行った。しかしながらそれは単に「テレビっ子」「テレビゲームっ子」に焦点を合わせるという意味でないことを、はっきりと主張しておきたい。現代の子供達の知らない唱歌や童謡に、日本の遊びの文化がうかがえることは先に述べたとおりである。我々はその音楽を現代の子供に合った形で演奏に工夫をし、歌い継いでいくことは大変意義のあることだと考えた。実際、今回の試みで手遊びや踊りを組み込んだ「四季のうた」は子供達に大変好評であった。

今年度の学生に関しての音楽的レベルは例年を下回るものであったといわざるをえない。その観点からいえば、観客の反応は大変懸念された。しかし予想に反して子供達の反応には手応えがあり、身を乗り出したり、一緒に口ずさんだりという光景も見られた。また親子でそれを楽しむ姿もあり、「歌い継いでいく」という1つのテーマが様々な角度から世代を越えて観客の方々に受け入れられたといえよう。音楽家の真似をする自己満足の演奏を披露するのではなく、本来幼児教育を行う者としての観客（＝幼児）を対象とする演奏が行えたのではないかと考える。このことは幼児教育・保育科の音楽教育の目指すところであり、その意味において今回のコンサートは成功であったといえる。

終わりに

精神面での弱さや人とのコミュニケーションを苦手とする世代の学生達が、1つのプログラムを完成させやり遂げたことは、それだけでも十分な成果となりうる。

しかしそれだけでなく、さらに打楽器を使った演奏をより楽しく工夫して見せることや、難しい唱歌の言葉に動作をつけ合唱を行うことも学生自らの力で行っている。これは身体的にも能力的にも未発達な子供達に、少しでも受け入れられるようにと考えた結果なのである。このような観点で幼児音楽を考えていくことは、現場の保育においても大きな価値を期待できるものである。

12月に行われた入学前のスクーリングで、ある高校生たちに童謡を披露した際、当然知っていると考えていた「先生とお友だち」「シャボン玉」「かたつむり」などを知らないと返事が返ってきた。彼らですら馴染みのない童謡や唱歌は、幼児に於いてさらに無縁のものであろう。そのような世代に受け入れられやすい音楽表現とは何か、について問題視するのであれば今回の「四季のうた」は大きな学習効果があったと思われる。

高度な音楽的演奏は人々を感動させたり、癒したりする。その専門性を目指しレベルの高い演奏を目標とすることは大切なことである。しかし幼児教育の中で求められている「音楽」がどのような方向性を持っているのかを教員自らしっかりと見定め、指導していかなければ

ならない。今年度のような音楽的レベルの学生達と接したことは、ある意味で演奏技術に頼らないコンサートの組み立てを考えるきっかけとなり、それまでの幼児教育における音楽教育の位置付けの曖昧さを見つめ直す良い機会となった。今回担当した学生たちの、演奏技術の不足を上回る前向きさと、創作意欲の強さに改めて感謝をしたい。